

# 河崎秋子『絞め殺しの樹』論〜二部構成を踏まえつつ〜

\* 小田島 本有

ODAJIMA Motoari

## A study of Kawasaki Akiko ~ Shimegoroshi no ki~

### 一 直木賞候補作品『絞め殺しの樹』

二〇二二年に発表された河崎秋子『絞め殺しの樹』は翌年の第百六十七回直木賞候補としてノミネートされた。道内では桜木紫乃、馳星周に続く直木賞作家誕生かという期待も高まったが、残念ながら受賞はならなかった。その後も河崎は二二年だけでも『鯨の岬』『介護者D』『清浄島』を相次いで刊行しており、その創作意欲は衰えていない。河崎が直木賞候補としてノミネートされたのは今回が初めてであった。ちなみに、同じ道内では釧路市出身の桜木紫乃が『ホテルローヤル』で受賞したのが二回目、浦河町出身の馳星周が『少年と犬』で受賞したのは七回目のノミネートである。それを考えると、初のノミネートで受賞することがむしろ珍しく、今後も河崎が再びノミネートされる機会もあるだろうと推測される。

直木賞発表後、選考委員による選後評が発表されている(※①)。ちなみに受賞作は窪三澄『夜に星を放つ』であった。『絞め殺しの樹』についての各選考委員のコメントを見ると、「取材を潔しとせぬ苦勞譚の詳述がフィクション性を殆くした」(浅田次郎)、「タイトルからして考えすぎ」、「結婚してから、物語は不意に色褪せ、輝きが失せてきた」、「苦勞というものがただの苦勞にすぎなかったら、暗さが覆い被さってきて、読む側に救いが無い」(北方謙三)、「北の大地に生きる女の辛苦の一代記という点で、桜木紫乃さんの傑作『ラブレス』と重なってしまい、別のアプローチがなかったかなあと、もどかしく思いました」(宮部みゆき)、「過酷な状況に耐えてがんばる主人公を最初は応援していたのだが、次

第に『手に職もあるのに、どうしてこの環境から逃げようとしななんだろうとイライラし』た(三浦しをん)、「苛立ちと疑問だらけ」、「主人公は自立したかと思ふと、また因襲の溜まり場へと向かう。価値観や人生観がころころと変わり、とても共感できなかった」(林真理子)、「その人物のありようの単純さが、壮大になるはずの物語をちいさなものにしてしまったように思う」(角田光代)、「主人公の主体性という意味で、『絞め殺しの樹』は物足りなかった。第一部のミサエの欲のなさはいったいどうしたことだろう」(桐野夏生)と、ほとんど酷評のオンパレードである。伊集院静に至ってはこの作品について一言も触れていない。このように『絞め殺しの樹』は直木賞候補作としてノミネートされたものの、最終選考の場では殆ど歯牙にもかけられなかった。その中であって、高村薫の選後評は他の委員たちとは明らかに一線を画していたのが注目される。

たとえば、主人公の生き方に共感できない小説はダメな小説なのだろうか。候補作のなかでもっとも厳しい評価だった河崎秋子氏の『絞め殺しの樹』は、評者以外のほぼ全員が女主人公の意志の弱い生き方についていけない、という意見だった。しかしながら、戦前戦後の北海道には厳しい自然と生活に翻弄された弱い人びとが山ほどいただろうし、その一人一人のささやかな感情の歴史を掬い取るのが小説だとしたら、本作の主人公のような女性の造形も十分ありうるだろう。また本作は、土地の歴史と風土が生きているという意味でも小説

『王道』である。一部の登場人物の造形の不自然さや、物語の過剰さが後味の悪さとなつている点を除けば、評者は本作を存分に堪能した。

『絞め殺しの樹』を高く評価しているのは高村だけであつた。高村自身、選考委員会での他の選考委員たちの発言に違和感を抱いたようで、そのことが右の文章からも十分伝わってくる。

このように、高村以外の選考委員はこの作品に対して否定的であつた。その理由の最たるものは、主人公橋宮ミサエに共感できないというものである。あれだけ苦難を強いられているのに、なぜ彼女は根室を離れようとならないのか、という根本的疑問がそこにはある。それは主人公の意志の弱さや欲のなさでもあり、作品を読んでみるとイライラしてくるという感想にも繋がる。あるいはいわば悪役として設定されている吉岡家の人々が一貫して変わることがないため、作品を読んでいる救いが訪れず、読むこと自体が苦痛になってくるということでもあつた。だが、このような選考委員たちの望み通り、ミサエが意志をもつて根室を離れる設定であれば良かったのかというと、それも違うようだ。そうした場合、かえつて作品は陳腐なものになつたのではないか、という思いを私などは禁じ得ない。

## 二 選考委員たちの発言に対する違和感

以上のように、主人公に共感できないという感想が複数の選考委員から挙がっていた。

河崎は以前釧路で開催された講演会の中で、「読み心地のいいものが必ずしもいい作品とは思わない」という発言をしていた(※②)。また、『絞め殺しの樹』の執筆に関しては、「生き死にも含めて自分で決定をする、そしてそれを受け入れたからには全うするというのも、私の中では軸としてはあつたのかもしれない。それは別に誰かがそれを褒めてくれるわけではないし、それによって本人たちが満足を得られるものでもないかもしれないけれども、きちんと生ききつた、その選択を自分で下したということ、その作中のなかで誰かが褒めるわけではないのだけれども、それはそれでひとつの高潔な生き方だというふうにわたしは捉えながら書いていました」とも述べていた(※③)。そのような作者であれば、選考委員たちの反応はある程度予想はしていたはずである。むしろこの河崎の発

言に比べ、選考委員たちの言葉がいかにも軽く感じられてしまうのは、果たして私だけなのだろうか。

例えば、なぜ主人公は根室を離れないのかという批判にしても、過去の根室においてそういう人たちはたくさんいた。資料をあさりながら河崎はそのことを十分知っていたはずだ。このような歴史に埋もれてしまう無名の人々を、形として残そうという意図が河崎にはあつたのである。辛ければ逃げればよい、という発言は選考委員たちが現代人、しかも都会人の感覚で登場人物を批判しているにすぎない。言うのは易い。だが、それゆえに言葉が軽くなっているのではないか。私の抱く違和感の二つ目はこの作品が第一部、第二部の二部構成になっているにもかかわらず、第二部について言及している選考委員がほぼ皆無という現実である。

第二部は、橋宮ミサエの妻子であり今は吉岡家の養子となつている雄介が実質的な主人公となっており、彼がいかなる意味を持つのかがこの作品の要ともなつている。ミサエはいまや故人となつている。雄介はミサエを実母として認識することはなかった。その彼が第二部においてミサエを対象化し、跡付ける存在となつている。そして、養子としてもらわれた以上、根室の吉岡家で家業の酪農を受け継ぐことを宿命づけられていた彼が、途中その状況から逃げたい誘惑に駆られるながらも、最終的には根室にとどまる意志を積極的に抱くようになる。その意味を改めて問う必要があるのではないか。それなくしては、この作品を本来の意味で読んだことにはならない。

そして、三つめは桐野夏生の次の発言である。

まさしく「絞め殺」される運命を書きたかつたのかもしれないが、としたら、絞め殺す側の感情の方を読んでみたい。あまりに理不尽で暴力的な虐待がどうして生まれるのか、傲りの生理を知りたいからである。タイトルの迫力に迫る人物を書いてほしかった。

(傍線・小田島)

これらのことが書かれていないという認識が桐野にはあるようだ。果たしてそうだろうか。絞め殺す側というのであれば、吉岡家の人々や小山田俊之などを筆頭に枚挙には暇がない。彼らの感情は彼らの発する言葉の数々から十分うかがえるし、直接の描写が仮にない箇所でも、彼らの感情を類推するに足るだけのもの

を作者は描いてはいるはずである。

これらの点を踏まえただうえで、私の『絞め殺しの樹』評は以上のようにまとめることができる。

- (1) 数多くある河崎作品の中でも人間洞察がとりわけ深い。
- (2) 奇をてらうことがなく、物語の展開が自然である。
- (3) 北海道の先人たちに対する慈しみが感じられる。
- (4) 読者を惹き込む力が図抜けている。
- (5) 自然（風土）と人間との関わりを見事に描いている。

(4) について言えば、北方謙三はミサエの苦勞譚に、三浦しをんは吉岡家の悪意のありように惹き込まれたことを述べている。好むと好まざるにかかわらず、この作品が強い磁力を持っていることを示していると言えるだろう。

### 三 屯田兵の末裔という誇り

「大体がして、屯田兵だからって何もかもが明治の世の中のまんまで行くわけがねえってんだよ。もう昭和なんだから」 (第一部「第一章 捻じ花」二)

吉岡光太郎が祖母にあたる大婆様を批判した言葉である。これだけを見ると、光太郎はいかにも大婆様を批判できる立場にいるかのごとくであるが、実際はその彼も、屯田兵の末裔の誇りに囚われた人間であることを免れなかった。

今の世の中、もとは屯田兵だ、この地に最初に鋤を入れた一族なのだから、となあなあで金を貸してくれた農協が、このまま変わらなくていてくれる保障などないのだ。

(第一部「第一章 無花果」一)

後年、養子の雄介によって父親の一郎が批判的に眺められている。ちなみに一郎は光太郎の長男である。ここで批判の対象とされている屯田兵という立場を笠に着て農協にすぎるとは、光太郎の時代から続いている。計画性のない酪農経営は屯田兵の誇りに依存したものであったのであり、そこから脱却できずにいた

というのが現実なのだ。

ところで、吉岡家の人々に沁みついてきた屯田兵の末裔という誇りを象徴的に示す場面がある。近所の林夫妻が、娘が結婚して働き手が足りなくなったため、吉岡家で働くミサエを借りたいと申し入れてきた。彼らに対応する吉岡家の人々の姿は実に象徴的である。

「とは言ってもねえ。もともとあなたさんとこは屯田兵でも何でもなくて、農業から抜けた人のところにやむなく入った訳でしょう。同じ集落で働いてるっていつても、意味合いが違う」

勿体ぶったように、光太郎が茶を啜る。林夫妻には茶は用意されていない。

(略)

「ねえ、親父さんもお兄さんも、親戚みんな、漁師なんでしょう？ 親戚いっぱいいるんでしょう？ なら、そつちから人手回してもらえばいいんでないの」

タカ乃が明るさに嘲笑を混ぜた声で提案した。答えが分かっているのに、わざと言わせるんだ、とミサエは直感した。

(略)

「そうですよ、腰も足も、使い通しでね」と頷くタカ乃の向こうで、勉強をする振りをした一郎と保子が底意地の悪い笑みを林夫妻に向けていた。

(略)

手について頭を下げた夫婦の姿に、ミサエはこの家に来た日、床に頭を押し付けられたことを思い出した。あの時はもちろん床の板目が見えるばかりで、この家の家族がどんな顔で見ているかは分からなかった。

しかし今、ようやくその答えを知った。夫婦も、成り行きを見守っていた子ども達も、とても満ち足りた、幸せそうな顔をしている。いっそ潔いほどに意地悪さが抜け、心底嬉しそうな四人分の笑顔を目にして、ミサエの脇腹に怖気が走った。実際に額に冷たい汗が浮かんでくるのを感じた。

(略)

「うちもこの子がいなくなると手が少なくなつて、牛舎もお勝手やらも大変なんだけどねえ、仕方ないでしょうねえ」

先ほどとは正反対のことを言う二人に、疑問を挟むこともなく「ありがとう

「ごぞいます」と林夫妻は再び深く頭を下げた。吉岡の家族の愉悅に満ちた表情を見て、ミサエはようやく、最初から人手を貸してやるつもりではあったこと、散々渋ることで売恩の値をつり上げたのだということに気がついた。

（第一部「第一章 捻じ花」一、傍線・小田島）

傍線部から吉岡家の人々の林夫妻に対する態度は明らかである。そして誰もが「満ち足りた、幸せそうな顔」を浮べているのを目の当たりにして、ミサエはこの家を自分が初めて訪れた時の屈辱的な仕打ちを想起し、怖気に駆られている。あの時も今も、吉岡家の人々はこうだったのだ。つまり、吉岡家の人々は屯田兵の末裔という誇りを笠に着て相手に対した時、家族の一体感が強まるのである。吉岡家に欠落していたもの、それは〈恥〉の概念だったろう。

注目したいのは、この場面でミサエがこの家の「心柱」とも感じていた大婆様がないことである。大婆様は屯田兵の末裔を誇りとしていた代表格と言ってもよい。だが、彼女は孫や曾孫たちとは明らかに違っていた。少なくとも大婆様には〈恥〉の概念があり、世間体を気にする姿勢があった。

彼女が大切にしていたものがある。それは漆器の黒い茶碗と、白妙という名の白い猫である。いずれも新潟から北海道に渡ってくる際に殿様から賜ったものであった。ミサエが大婆様に初めて会った時、彼女はこの碗を一心に磨いていた。白妙も大婆様にだけ懐いていたし、大婆様は他の家族に白妙を触れさせることをしていない。だが、後年ミサエがこの家を出て札幌の葉問屋で働く時、大婆様は茶碗の一つを他の家族には内緒でミサエに渡している。

ミサエは給金も休みもなく、ひたすら労働を強いられる使用人であった。その中であって、ミサエの大婆様に対する目は、他の家族に対するものとは明らかに異なっていた。

大婆様はミサエにとっても敵しい人であったことは変わりがない。ただし、大婆様はミサエだけでなく吉岡家の人々に対しても同様に敵しかった。孫の光太郎・タカ乃夫婦、さらにはその子どもである一郎や保子に対しても威圧的だったので、彼らは大婆様を恐れながら心の中ではその不満を鬱積させていった。それが証拠に、大婆様の死後、彼らは死者にまともな戒名を与えず、仏壇も取っ払った。おまけに興味返しのように犬を飼い始めることもしている。ところが、犬の世話を必ずしも大切にしているわけではなかった。

このような吉岡家の人々を一方におくと、大婆様は使用人であったミサエを心のどこかで認めていたと言えるのではないか。それはあれほど大切にしていた漆器の茶碗の一つをミサエに託したことに端的に現れている。もしかすると、大婆様が大事にしていた屯田兵の精神を本当の意味で受け継ぐに足るのはこの娘である、という認識があったのではないか。

それ以前でも、タカ乃の意向に反して大婆様はミサエのために便宜を図る場面が幾つかあった。例えば、ミサエがタカ乃に体調異変を訴えた時、タカ乃は全く取り合おうとしなかった。しかし、これを聞いた大婆様は「仮にも武士の家系のうちが、加減を間違えて使用人を使い潰したなんて言われたら、それこそ恥だ」という理由で、ミサエを一日休ませている（第一部「第一章 捻じ花」一）。また、小山田武臣と寺の住職が家にやってきてミサエを学校に通わせるよう進言したときも、それには全く耳を貸そうとはしなかったタカ乃とは対照的に、大婆様はミサエを学校に通わせることを決めている。「今の世の中、使つてる子を学校にもやれないと思われたら、うちの甲斐性を問われる」というのがその理由である（同・二）。そして、光太郎・タカ乃夫婦がミサエを地元的女郎屋に高額で売ろうと画策していることを小山田武臣からの情報で知り、怒りに駆られて「どうなんだ。ミサエ。お前はそんな恥知らずか」と糾弾し、さらには小山田の望む通り、ミサエを札幌の葉問屋で働かせることに同意したのもこの大婆様であった（同・三）。これら一連のことを振り返ると、そこには屯田兵の末裔としての誇り、そして世間の目を気にする〈恥〉の概念が大婆様には確かに存在していたのである。

もともと新潟に住むミサエを引き取りたいという意向が示されたのは、吉岡家から届いた手紙である。堂々とした墨書であった。これはおそらく大婆様の筆跡である。大婆様はこの家一番の教養人でもあった。ミサエは大婆様の許しもあつて学校に通うが、仕事の合間を縫って勉強にも励む努力家でもあり、成績もよかつた。そういう彼女を大婆様は認めてもいたのだろう。

根室を離れて九年后、ミサエは小山田武臣の懇願もあり、開拓保健婦として再び根室の地を踏む。既に大婆様は亡くなっていた。吉岡家を訪れて焼香しようにも仏壇はない。そしてかつてあれほど整理整頓されていたはずの家の中は乱雑になつており、かつて彼女が寝ていた廊下の隅は綿ぼこりが落ちていた。窓の棧は黒くカビがこびりついており、それらを目の当たりにしてミサエは大婆様を失った淋しさを一層痛感するのである。

#### 四 小山田俊之とはいかなる人物か

小山田俊之は小山田武臣と恒子との間に生まれた一人息子であり、作品の中で重要な役割を果たす人物である。

吉岡家が屯田兵の末裔としての凝り固まった誇りを抱き、それが相手を見下すときに発揮され、そのことが吉岡家の一体感を醸成していたことについては既述した。

小山田俊之の場合も、自分の頭の良さを誇るところがあり、それは北大農学部を卒業することで更に増幅された印象がある。彼は自己絶対化の傾向が幼い頃からあり、そのため自己を対象化できず周囲を蔑視する傾向が殊更強かった。それは次の発言からも容易に見てとることができる。

「だからさ、変革が必要なんだよ。そのためには旗印が必要なんだ。根室の、低学歴の農家連中を、我々が率先して啓蒙してやらなければならないんだよ」  
「我々って誰ですか」

「決まっているだろう。俺や君のような、最高学府で農業を学んだ人間だ」  
なにを分かりきったことを、と小山田はまた鼻で笑い、噛み切ったエビの尻尾を皿に吐き出した。

「なあ雄介君。君はお父さんと違って、物の道理が分かる子だと俺は思っているよ。大学出たら、根室に戻ってくるんだらう？ 俺の手伝いをしないか？  
なんなら吉岡の土地と牛はうちで全部買ってやるから、俺の秘書をすればいい」  
(第二部「第二章 菩提樹」一、傍線・小田島)

自分や雄介を「最高学府で農業を学んだ人間」として高みに置き、「根室の、低学歴の連中」を蔑んでいる。小山田俊之が雄介に協力を要請したのはこの時ばかりではない。その後も、恩師である綿貫教授の部屋で再び協力を要請している。一度断られたはずなのに、なぜ小山田は雄介にこだわるのか。それは雄介が同郷であるばかりでなく、同じ北大農学部の出身だったからと言えよう。小山田は雄介を「物の道理が分かる子」として評価しているが、二人はそれまでにまともな話を殆どしていない。つまり雄介の中身を知らず、肩書きだけで評価しているに

すぎないのである。そこに小山田の底の浅さが透けて見えてしまうのだ。

小山田俊之は確かに優秀な成績ではあったかもしれないが、幾つもの欠落部分を抱えていた。

その傾向は幼い頃から見られ、息子が「人の気持ち分からない」ことに悩み、両親である武臣・恒子夫妻はミサエに相談してもいる。中学生の頃、自分の母親が悪口を言われていたという話を聞いて、俊之はその噂の主である老婆に掴みかかった。そのとき俊之は「自分は悪口を言う奴らを粛清しようとしただけだ」と言い放ち、自分の正しさを主張した(第一部「第三章 山葡萄」一)。

そして俊之は同学年の友だちとは折が合わず、その結果年下の子ども達を従え、そこのお山の大将になっていた。ミサエの娘である道子が自殺する要因の一つとなったいじめ事件は、このような中で生まれている。

また、彼は大学卒業後根室に戻り、大規模な酪農経営に乗り出し注目された。しかし、その一方では、いつも従業員募集の広告が新聞に載っている。事業を拡大したからではない。従業員が定着しなかったのである(第二部「第一章 無花果」三)。それだけ俊之に従業員がついていけなかったということだ。

そして彼は理路整然と理想を語る。しかし、その内容が空疎であると雄介は昔から感じていた。そして俊之は根室市の市議会議員に立候補したものの、最下位で落選した。一郎はこのことについて息子の雄介から尋ねられた際、「なんか本人は出る気満々で、農家とか、漁師とか、元島民連合に色々コネつけに回ったってのは聞いたけど、あっさり落ちたぞ。しかも最下位、得票はぎりぎり三ケタだったそうさ。すかした面で中身ないことばっかりべらべら喋ってるからだ。さまあみる。性懲りもなく次期にまた出馬する気らしいが、まあ無理だわな」とこき下ろしている(第二部「第二章 菩提樹」三、傍線・小田島)。俊之は語る内容が空疎であることが分かっていない。そして、従業員が絶えず離れていくことも、選挙で最下位になったことも、つまるところ人望のなさが露呈される形になっている。

最下位での落選はおそらく彼の人生において初の挫折だったのではないか。落選をきっかけに妻が子どもを連れて立ち去った。そして従業員もいなくなり、いまや俊之一人きりになっていて、そのためあれほど整備されていたはずの家の周囲の荒廢が目立つようになった。そして、祖母タカ乃の葬儀で雄介の目の前に現れた俊之は痩せこけて眼窩がくぼみ、顔色の悪さが目立っていた。時々空咳に

むせんだりもしている。途中俊之が馬鹿笑いをするシーンがあるが、作品では「死にかけの子牛の呼吸のような笑い声」という形容がされている(第二部「第二章 菩提樹」三)。これは俊之の死を暗示するような描写である。そういえば作品の中では俊之がかなりのヘビースモーカーであることがしばしば描かれていたが、それが伏線になっているのかもしれない。

## 五 橋宮ミサエに対する小山田俊之の憎

作品を読む限り、少なくとも中学生の頃から小山田俊之はミサエに対して批判的な態度をとっていた。その理由が明らかにされるのは、彼が恩師である綿貫教授の研究室を訪れ、そこにいた雄介に語った場面である。彼は協力要請を断られた際にあたかも腹いせのようにして、「雄介くん。君の母親(注・ミサエ)はね、うちの親父の隠し子だったんだよ」と、思いがけない事実を暴露する。彼は「あの人のせいで、うちは色々大変でねえ」と語り、「うちの一家が根室に移った頃にバレー、お袋は君の母親のことは本人も知らないことだからと優しくしていたが、当の親父のことは腹の底で最後まで憎みながら病死したよ」とまで言う(第二部「第二章 菩提樹」三、傍線・小山田島)。その思いがけない展開に、雄介をわざわざ自分の部屋に呼び出した綿貫教授が動揺を隠せないほどだった。

小山田の言葉によれば、隠し子の件で両親の仲は険悪であったとのことだが、この小山田の言葉をそのまま受け入れるべきなのかという躊躇いはある。というのも、息子の性格についてミサエに相談した時の両親の姿からは、そのようなことが容易に想像できないからである。そして、生前、母親の恒子は開拓保健婦として苦勞するミサエの心の拠り所にさえなっていた。小山田の言う通り、ミサエに関しては本人の知らないことであると割り切った恒子が付き合っていた、という可能性は十分ありうる。そして、母親の悪口を言ったという老婆に襲いかかった事件から想像するに、小山田俊之は母親を溺愛していたのかもしれない。母親に対する思い入れが強い分、父親に対する憎悪が高まったのだろう。

仮に小山田の言うことが正しかったとしても、父親の隠し子であるミサエを否定してかかるというのは真つ当な態度とは言えない。母親の恒子がミサエに対して優しい態度を心がけていたのであれば、息子である小山田の態度は母親の顔に泥を塗ることにもなるのだ。これが母親を愛する息子の態度と言えるのか。

しかも、小山田は心に抱えた不満をミサエではなく、その娘である道子にぶつけた。それは筋違いと言うべきものだろう。

小山田は十歳の道子に、母親のミサエのことを「ひどい人」となじった。彼が指摘したのは、ミサエが出産に立ち会って何人もの赤ん坊が死んでいること、林足助・ヨシ夫妻の間に子どもが生まれる際に牛に使う薬を使ったこと、あるいは妊婦が出産で苦しむことが分かっているなら強制的にでも病院に行かせるべきだったこと、などである。

ミサエは保健婦として、妊娠している女性には早くから病院に行くよう、お願いを再三にわたってしていた。だが、例えば留雄の出産の際が典型的だったように、ミサエが幾度となく医者に診てもらおうよう進言しても、家庭の問題に入り込みすぎではないかと、当事者たちからは跳ねのけられる。ところがいざ難産という非常事態になり、夫の足助がミサエに救いを求めてきた。産婆が来られず、医者も市街から呼ばねばならない状況の中、ミサエは違法であることを承知しつつ、足助の了解を得て、牛に使うカンフル剤を人間の体重に合わせた量で打って対処した。この対処については、後で駆けつけた医者も適切であったと述べている。ところが、小山田はそれらの詳しい事情を知らず、ミサエのとった行動をひとつひとつ非難の理由にした。それらのことを十歳の道子が聞かされて、状況がよく把握できるはずもない。事実、道子は小山田にいじめを受けた後、「何を言われたの?」とのミサエの問いに対し、「なんか、俊之君ばかり喋ってたんだけど、難しい言葉が多くて分からなかった。ずるい、とか、正しい、とか、そういうのは分かったけど……」とだけ答えていた(第一部「第三章 山葡萄」一)。道子が小山田の言葉に反論できなかったのは無理もない。小山田は道子が反論しないことをもって、彼女が自分の言葉を認めていると判断した。したがって自分は「正しい」と、小山田は認識したのである。これがどれほど独りよがりの、単純な発想であるかは一目瞭然であろう。

道子の自殺に対しても、小山田には全く後悔の念はない。後年、雄介に道子の自殺のことを尋ねられたとき、彼は「ああ、嬉しかった。とても嬉しかったよ。自分が正しいと証明できた、人生最初の知らせだった」とまで答えている(第二部「第二章 菩提樹」三)。たとえ歪んだものであったにせよ、小山田はこれを成功体験とした。彼が中学生の時である。自分の正しさに自信を得た彼は、その後大人になり、雄介の父親一郎の少女暴行事件の際も、被害者の親の代理人とし

て一郎を見事に糾弾した。

だが、道子の自殺を知って、自分がいじめに加担したことを後悔した人物が一方ではいた。それが雄介の姉の吉岡敏子である。当時敏子は深い考えもなく、道子を疎外する小山田の一派に加わった。その道子が自殺し、その葬儀に参列した時、「ひたすら怖かった」と、雄介に告白している(第二部「第一章 無花果」一)。敏子と雄介は一回り以上離れた姉弟だが、二人には血の繋がりが無い。しかも敏子は中学卒業と同時に地元を離れて東京で生活している。二人が再会したのも祖父光太郎の葬儀で敏子が帰省した時である。故郷を離れて以来、敏子は故郷とは縁を切っており、久しぶりの再会だった。自殺した道子の実弟である雄介がまさか自分の家の養子になるとは、まさか敏子も思いが寄らなかった。雄介は道子が亡くなってから生まれており、当然のことながら道子のことは知らない。それでも敏子は、雄介に自分が道子をいじめた側の一人だったことを告白せずにはいられなかった。そして、敏子は東京に帰る際に雄介に荷物を持たせて近くの駅まで向かい、別れ際、「小山田さんには気をつけなさい」との忠告を雄介に与えたのだった。

## 六 なぜミサエや雄介は根室にとどまったのか

### (1) 橋宮ミサエの場合

河崎が『絞め殺しの樹』で書きたかったのは、根室を舞台にしてこの土地から離れたいという思いと、この土地にとどまるべきであるという思いとの葛藤に悩みながらも、その土地との関係を宿命づけられた人間の姿であった。第一部の橋宮ミサエも第二部の吉岡雄介も、何度か根室を離れたいと思ったときがある。だが、彼らは結果的にはそのような選択をしなかった。その心のドラマこそ河崎が書きたかったものである。選考委員の殆どがそうだったように、第三者から見ればミサエや雄介は愚かに見えるのかもしれない。だが、その愚直な人間像を描いていくところに河崎の真骨頂はある。

まずミサエの場合を考えてみたい。

新潟にいた彼女が生まれ故郷である根室に戻るきっかけになったのは、吉岡家からミサエに届いた手紙である。ミサエの祖母にあたる人がかつて吉岡家で働い

ていた。吉岡家からの手紙では、ミサエを養育したいと書かれてあった。この手紙が来た時、橋宮家ではミサエの意向が確認されたが、ミサエはそのとき根室に行くことを期待されているという、無言の圧力を感じた。形の上では九歳のミサエの意向が尊重されたことになるが、実質的には無言の圧力に従ったことになる。しかも、吉岡家がミサエを養育したいというのはほんの上辺だけのことであり、実質は使用人としてミサエは吉岡家を買われていったに等しい。

その彼女が、小山田俊之の父親である武臣のおかげで根室を離れ、札幌の菓問屋で働く機会を与えられた。その彼女に再び根室に戻ってきてほしいと頼んだのも小山田武臣であった。言うまでもなく武臣はミサエにとって恩人であり、決定的に医療従事者の少ない根室のために働いてほしいとの依頼は、ミサエの心をある種拘束するものであったのは間違いない。ただ、そこには彼女なりの使命感が当然あったし、いったん決めたからにはそれを自分の責任として受け止め、覚悟を決めるのが彼女だった。彼女自身根室で苦勞した人間だっただけに、そこで苦勞する人々の顔も浮かんだ。その人たちのためにも彼女は根室に戻ったのである。彼女は根室に戻り、保健婦として精いっぱい対処した。だが、予想されたこととはいえ、彼女はしばしば無理解な地元民に苦勞することになる。その典型的な例が、妊娠した腹の大きさを懸念し、早くから医者に見てもらおうことを進言しながらも、耳を貸そうともしなかった林足助・ハツ夫妻である。彼らはそれまで子どもが七人生まれており、その経験が根拠のない自信となつて、若い保健婦の言葉を受け入れようとしなかった。貧しい林の家では医者に見てもらおうのを渋る思いもあつたため、ミサエは厄介な存在でしかなかった。そこへハツの難産である。あれほどミサエを一蹴していた足助が、今度はミサエに助けを求めに来る事態となった。この非常事態の中、必死になつてミサエを助けてくれたのが林家の次女ユリである。市街にいる医者連れてきてほしいとミサエが呼びかけたとき、自転車を漕いでそれに応じたのがユリであった。こうして男の子(留雄)が無事に誕生したのである。

ユリはその後も根室の地にとどまり、ミサエの苦勞ぶり——道子の自殺、夫(木田浩司)との離婚、実子雄介との別れ、そして周囲の無理解——を身近で見えてきた人間である。ユリは寺に嫁ぎ坊守となるが、ユリはこの作品の脇役ではあるものの、一見すると不遇と思われがちなミサエの生涯を掬い上げる存在として、重要な役割を果たしている。ユリの働きはミサエとの関係ばかりではない。ミサエ

没後、彼女の実子である吉岡雄介にミサエのことを伝える役割を果たしていた。

## (2) 吉岡雄介の場合

雄介は離婚後にミサエが出産した子どもだった。道子が自殺し、それが引き金となってミサエは木田浩司と離婚したが、その時妊娠していたのが雄介である。彼女は中絶も考えた。それでも周囲の説得もあり出産したが、その子を引き取りたいと申し出たのが吉岡家だった。当時吉岡家には家業を引き継ぐべき男の子がいなかった。「雄介」と名づけたのはミサエである。雄介が自分の手元から離れた晩、彼女は自分の腕をきつく噛みしめて眠った。その歯型が数年経つてもうっすらと残っていたという。ミサエは決して雄介には近づかないこと、実の親であることを伝えることを吉岡家と約束させられていた。作品の中で、ミサエが保健婦として吉岡家を訪れた際に家族は不在で、ただ一人幼い雄介がミサエの前に現れる場面がある。このときもミサエは溢れる思いを抑えて対応している。

このようなわけであるから、雄介はミサエに関する情報を殆ど与えられずに育った。成長する中でかすかに記憶のある保健婦が実の母だと周囲から聞かされたりするが、ミサエに関する情報は決定的に乏しかった。ミサエが亡くなったことを知るのも死後一年半ほど経ってからである。このような状況に置かれていたため、雄介には実母であるといっても本来ミサエに対する愛情が湧いてこないのも当然のことであった。

第二部の主人公は言うまでもなく雄介である。彼の成長は逆説的ではあるが、小山田俊之の存在が大きく関わっていた。

雄介は当初、小山田に対してはむしろ肯定的評価をしていたと言っている。

小山田は北大卒業後、根室に戻り、従来のやり方に捉われない酪農の大規模経営に乗り出し、成果を上げていた。

あるいは、父親の一郎が少女を暴行した不祥事の際には、被害者の両親の代理人として現れ、その理路整然とした話で一郎を屈服させた。雄介にしてみれば身内が恥さらしになったようなものだが、小山田の姿はいかにも頼もしく見えたはずである。

だが、その肯定的評価にやがて揺らぎが生じ始める。きっかけは父親の運転手替わりとして寄り合いに顔を出したときだ。雄介が北大を受けるといふ話を聞き

て小山田が近づいてきた（そもそも祖母のタカ乃や父親の一郎が雄介に北大へ行くよう発破をかけたのも、不祥事で一郎が苦杯を嘗めた相手である小山田が北大の卒業生だったからである）。だが、このときのやり取りで、早くも雄介は小山田に苦手意識、違和感を抱いている。

そして、祖父光太郎の葬儀で久しぶりに帰省した姉の敏子が、小山田に乗せられ自分が道子をいじめた事実を打ち明け、別れ際雄介に「小山田さんには気をつけなさい」と警告した。これによって小山田に対する雄介のイメージに混乱が生じることになった。

そして、決定的だったのは、祖母タカ乃の葬儀で小山田が現れた時である。この時の雄介との会話は極めて重要なので、長いが煩瑣を厭わず引用したい。

「君も牛飼いの家の子なら分かるだろう。生き物なら、牛だって人間だって、生まれつきどうしても弱い奴はいる。体だけでなく、心まで弱くて苛められて食い負けて生き残れないようなのが。そういう手合いだったんだよ。橋宮ミサエの娘は。だから仕方ないことだ！」

「なんなんだ、あんた」

雄介から、礼儀と遠慮が消し飛んだ。掴みかからないでいるのが精いっぱいだ。

この男が、母を悪しざまに言い、実姉を追い込んだ理由は分かった。自分では分かりえない地獄があり、当事者全員がこの世からいなくなったとしても、消し去ることのできない痛みはある。

しかし、人を憎むやり方にしたって良し悪しはあるのだ。吉岡の家も相当歪んではいるが、この男は、違う方向にねじ曲がりすぎている。そして、自ら正す気も更々なさそうだ。

「弱いのが誰だって？」

一歩、小山田の方に足を進めた。雄介は一瞬目を閉じ、開く。目の前では小山田が何か笑いをこらえるようにして雄介を見ていた。

観察している。面白がついていやがる。こいつと血が繋がっている、その事実が忌まわしくてならない。怒りが却って雄介を冷静にした。

「小山田さん。弱いのはあんただろうに」

「俺は弱くなんかない。弱いのは、あいつらと、あいつらに関わる全ての奴



らだ。お前もだ」

(略)

俺や、家族や、死んだ肉親の住んだこの地は荒野で、俺たちも生きざまは哀れな木のようなものに過ぎない。だからこそ、そこに何かの疵をつけたり、毒を撒こうとする者を許してはならない。

初めて、雄介は身内のために怒っていた。実母や実姉のためだけでなく、しかしここで生きていた全ての人々のために憤怒していた。こいつは、俺の住む地までもいつか歪める。

「なあ、叔父さん、よく聞いてほしい」

あえて肉親としての単語を出して、腹の底から声を絞り出す。両手でがっちり細い肩を押さえて手に力を入れると、小山田は眉間に皺を寄せた。

「俺は、俺はな、ちゃんとここに帰ってくるよ。そして、予定通りにうちの牧場を継ぐ」

「へえ。果たしてできるのかなあ」

「やる。絶対だ。そして、あんたより立派な農家になってみせる」

小山田のへらへらとした表情が、雄介の断言によって歪む。ざらざらと悪意に漲っていたその目がぐらりと怯える。躊躇してやる優しさは雄介にはなかった。

「ねえ、戦いましよや。あんたが憎くてたまらない。死んでも許せない橋宮ミサエの、その代わりに俺は戦ってやるよ。あんたもうちを、吉岡の家を本気で潰すぐらいのつもりでいれればいい」

前触れもなく手が伸びてきた。細い手で襟元と胸元を掴まれる。しかし、雄介の体はびくともしない。(第二部「第二章 菩提樹」三、傍線・小田島)

この引用文の直前で、小山田はミサエを「あんなどうしようもない女」と完全否定していた。そしてその娘道子の自殺を、「嬉しかった」とまで豪語する。小山田に言わせると、道子は「体だけでなく、心まで弱くて苛められて食い負けて生き残れない」「弱い奴」にすぎなかった。この言葉に激高した雄介は、小山田に向かって「弱いのはあんただろう」と切り返す。このとき雄介は「両手でがっちり細い肩を押さえて手に力を入れる」ことをしている。これはかつて、綿貫教授の部屋で対面したときに小山田から「君の母親はね、うちの親父の隠し子

だったんだよ」と衝撃的な事実を告げられた時、小山田が雄介の肩に手を置き、「肩に食い込む手の力が強い」(第二部「第二章 菩提樹」三)と書かれていたことを想起させる。立場はすっかり逆転した。今まで叔父には見せていなかった雄介の態度であった。

そして雄介は「あんたより立派な農家になってみせる」と言い放つ。憎い小山田と戦う決意を雄介は語った。雄介が積極的意志をもって根室にとどまることを決意したのは、小山田の挑発的な言葉が引き金だったのである。

次に雄介が断行したのは、今まで忍従を強いられていた母ハナを吉岡家から解放させることだった。ハナはかつて中学生の時に一郎に体を奪われて半ば強引に結婚させられ、その後も虐げられる立場にあった。かつて雄介は姉の敏子から、このままだと腐るからここから逃げるよう言われていた。雄介はこの地にとどまり、その代わりにハナを旅立たせるよう促したのである。考えてみれば、実母のミサエにしてやれなかったことを、雄介はハナに対して行ったのだ。ハナを旅立たせるには叔母ユリの力も借りた。

妻ハナの突然の失踪は、当然のことながら夫の一郎を激怒させた。だが、その興奮した父親の姿を目の当たりにしても、今の雄介にはあらゆるものに立ち向かう覚悟ができており、ある種のふてぶてしさすら感じさせる。それは一郎に対する切り返しの言動にも明らかだ。

「父さんはそう言うけどさ。母さんが出ていった理由、俺は少し分かる気がする」

(略)

「おめえ、なんてこと言うんだ。そんな……」

父は怒りに震えている。構わずに雄介は続けた。

「むしろ今まで、よく耐えていたんだと思うよ、母さんは。偉いでないか。俺が卒業して戻ってくる見込みがついて、こうして握り飯まで作って、責任果たしてから出てったんだ」

「おめえ、なんちゅう生意気な。ここまで育てた恩も忘れて、おめえ、ばかっただれが、この……」

雄介が御馳走さん、とふきんで手をぬぐった瞬間、拳が飛んできた。こめかみに少しかすりはしたが、よけられたせいで父はそのままどう、とうめき始

めた。

「どうせ、どっか行っちゃまうんだろ。ハナもお前も、誰も俺のこと馬鹿にして。そうやって離れたところで笑いものにすんだ」

「しねえよ」

きつぱりと、雄介は言い切った。

「父さんのこと笑いものにする暇なんて、誰もねえよ。それより自分の生活に手いっぱいだ。自惚れてんでねえ。間抜けなこと言ってる暇あったら、母ちゃん探しにでも行ったらどうだ」

雄介の言葉に、父は弾かれたように身を起こした。きつく雄介を睨むと、外の車に乗り込む気配がある。すぐに荒いエンジン音がして、タイヤの軋む音とともに遠ざかっていった。駅の方向だ。空港という選択肢は考えていないのだろう。母が飛行機に乗ってみたいと言っていたことを、果たして父は覚えているだろうか。母が十分な資金を持っていることを知っている身として、雄介はあまり心配をしていなかった。(第一部「第二章 菩提樹」三、傍線・小田島)

## 七 木田浩司という男

木田浩司は言うまでもなくミサエの夫となった人物だが、道子の死後二人は離婚している。

この木田浩司という男は、小山田俊之との共通点が伺える。ともに北大の出身というのもそうであるが、二人の性格を象徴的に示すエピソードがある。

それは、木田が貰った餡餅を口に入れたところ、思わず吐き出す場面だ。彼は「粒餡じゃないか」といきり立つ。彼によると、豆の皮は豚の餌であり、人の食べるものではないという。そういうものを有り難がって食べるのは「卑しい」とまで言い放った(第一部「第二章 蔓梅擬き」三)。

一方、小山田もすすきの飲食店に雄介を誘ったとき、エビの尻尾を食べない。「食べる訳がない。知らないのか、エビの殻は虫の殻と成分がほとんど同じなんだぞ」というのが彼の言い分だった(第二部「第二章 菩提樹」二)。

極端なまでの潔癖さゆえ、却って他の人たちに距離感をもたらししてしまうという点が類似している。事実、ミサエや雄介がそうだった。

こればかりではない。二人は自らの正論(正義感)を振りかざし、それを相手

に一方的に押し付ける傾向がある。一見正しそうだが、そこには相手に対する顧慮はない。木田浩司は見合いの日に早速ミサエにプロポーズし、了解を得られると手帳を取り出し、即座にスケジュールを決めていった。そこにはミサエが異論を挟む余地はなかった(第一部「第二章 蔓梅擬き」三)。一方の小山田俊之も、突然雄介のバイト先に現れて雄介を食事に誘う。そのとき店長が認めたこともあり、雄介の意向にはおかまいなく、待ち合わせの時間と場所を一方的に決めていた。さらに、雄介が自分からの協力要請を断るやいなや、「割り勘だよ」と宣言している(第二部「第二章 菩提樹」二)。自分の思い通りにいかないと機嫌を損ねるといいうのも、二人の共通点だった。

木田浩司は当初、見合いの席でミサエの好ましい理解者として登場した。だが、「これから先、俺のいうことを第一で考えてもらわなきゃ困るよ。主人なんだから」という、結婚前の言葉が既に示すように、自分第一の人間だった(第一部「第二章 蔓梅擬き」三)。結婚後はその傾向がより明らかになる。「何より、お前は母親なんだからさ。もうちょっと、子どものこと考えて、時間を割いてやれよ」と語っていた木田自身は、週に一度程度、「学校はどうだ?」と、新聞を見ながら道子に形式的に尋ねるばかりである(第一部「第三章 山葡萄」二)。これで本人は娘と向き合っているつもりだった。

夫婦が住むことになった家は、ミサエが恩のある小山田武臣から勧められたものだった。これについても木田は「俺は我慢したわけだよ」と不満を漏らしている(同)。あたかも自分だけが結婚生活で我慢しているかのような口ぶりである。そして気に入らないことがあると、わざと物音を響かせ、無意味に壁を殴って、ミサエに「返事は?」と、粗暴な振る舞いを見せるのだった。

そして決定的だったのは、道子が亡くなって初七日が終わった直後に、約束があったからと、武佐岳に行く準備を始めたことである。啞然とするミサエに対して、「本当、面倒くせえなあ」とぼやき、こゝろも言った。

「大体お前が母親として道子のことちゃんと見てたら、自殺しなかったんじゃないのか?」(第一部「第三章 山葡萄」三)

こうして木田は登山に出かけて行った。そこにミサエの気持ちに向き合おうという姿勢は見られない。ミサエが木田との離婚を考えるようになるのは必然的だ

ったのである。

## 八 ミサエの道子への向き合い方

夫に言われるまでもなく、ミサエは彼女なりに道子とは向き合ってきた。それは作品を読むと十分伺えることである。

だが、ミサエは道子を叱るときに、必ず自分の少女時代のことを引き合いに出していた。そうなる道子には返す言葉がない。

ミサエは少女時代に吉岡家で苦労を味わった経験がある。その彼女からすれば、道子は甘ったれているようにしか見えない。自分で髪が結べるようになったと道子は言うが、ミサエにとってそれは当たり前のことである。これは道子にとつつまり道子の目線でその成長を認めてあげることがなかった。これは道子にとつて酷なことである。しかも道子は、母親が保健婦として多忙な毎日を送っているのを目にしており、道子なりに我慢していた。そして夫の十分な協力も得られないなか、ミサエは彼女なりに必死だったのである。

そのようななかで、道子がいじめ事件の被害者であることが判明する。なぜ娘がいじめられることになったのか、ミサエは道子に尋ねる。途中のプロセスは分かっていたものの、その肝心の理由については曖昧模糊としている。小山田俊之から投げつけられた言葉の数々が、道子の理解の範疇を越えていたからである。

このとき、ミサエが道子に求めたこと、それはもつと強くなることであった。ミサエ自身、自分が強く生きてきたという自負がある。それと同じものをミサエは娘に期待したのである。

そのため、ミサエは道子に「元氣を出しなさい」「沈んだ顔をしているといふことがやってこないよ」「道子はお母さんの子どもの、正しいことをして頑張っていればいいことがあるわよ」としばしば語りかけるようにした。励ましのつもりだった。

(第一部「第三章 山葡萄」二、傍線・小田島)

これが道子に対する励ましになるだろうか。答えは否である。ミサエ自身、親の愛情を知らずに育ってきた。それが幾分かなりとも影響していたと言えよう。

そして、道子の自殺後、判明したことが二つある。

一つは警察からの報告で、道子は二度自殺を試みていたという事実である。山葡萄の蔓を首に絡ませて飛び降りたが、最初は蔓が切れて助かった。それでも彼女は諦めず、もう一度首を括ったのである(第一部「第三章 山葡萄」三)。

もう一つは、道子が初潮を迎えていたことである。ミサエは道子の死後、押し入れの布団の奥に赤黒く汚れた数枚の下着を発見することで、その事実を知った(同)。初潮を迎えることについて、母子の間でその会話がされていなかった。だとすれば、知識のない道子にとって汚れた下着は恐怖以外の何ものでもない。道子が押し入れの奥に隠したのは無理もないことである。それまでミサエは、道子はいじめのために自殺したとばかり思い込んでいた。だが、初潮を迎えたことの恐怖が自殺のさらなる誘因になった可能性は大いにある。ここにミサエのショックがあった。自分は果たして娘と本当の意味で向き合えていたのか。洗濯機に入れられる下着の枚数が少なくなっていることに気づけていれば、もつと違う対処ができたかもしれない。少なくとも、ミサエは自分が初潮を迎える前に、母親とそのような会話をする機会とは与えられなかった(※④)。そのことが、いざ自分が母親となったときに影響していたのである。

## 九 白い猫、各章に付されたタイトルの持つ意味

『絞め殺しの樹』ではしばしば白い猫が登場している。

最初に登場する猫は白妙という猫で、大婆様が大切に可愛がっていたものだった。大婆様の言葉を借りれば、この猫は新潟を離れて北海道に渡ってくる際に殿様から賜ったものであり、大婆様にとつては実に大切なものだったのである。大婆様は他の家族にも白妙には触れさせなかった。大婆様が亡くなった後、吉岡家で犬が飼われるようになったのも、こうした大婆様に対する反発があったのだから。

その白妙が二匹の子猫(白坊・繭)を産んだ。ミサエはこの子猫のために牛舎から牛乳を持つてくることを大婆様に提案し、受け入れられた。その牛乳を飲ませるのは思いがけずミサエの役割となる。子猫たちに牛乳を飲ませる様子を見つめる大婆様の黒い瞳が、ミサエの視点を通じて印象的に描かれている。このとき、ミサエは白猫との関係を大婆様に認められたと言っている。

白妙は寒い廊下で寝ることを強いられていたミサエの布団の中に一度入り込

み、彼女に温もりを与えた。ミサエが熱を出して体の異変を訴えた晩のことである。やがてミサエは深い眠りについたが、目覚めると白妙の姿は消えていた。白妙がミサエの布団に潜り込んだのはこの夜限りである(第一部「第一章 捻じ花」一)。また、寒い戸外でミサエが仕事をしていたとき、白妙が放尿のため外に出てくる場面があるが、用を済ませて家に戻る時、白妙はミサエに体を触らせており、指先に残る温かな毛の感触がミサエの心に残った(同)。いずれにせよ、白妙は寒さに震えるミサエに温もりを与えてくれる存在だった。

白妙は大婆様にしか懐かなかつたが、白坊と繭は人懐こく、ミサエの心を和ませてくれた。

道子が可愛がっていたのがノリという白猫である。道子の居場所が分からなくなり、それを捜そうとしていたミサエを雑木林の中の自殺現場まで導いたのもノリであった。だが、それ以後ノリが姿を消した(第一部「第三章」四)。ある意味、ノリは道子と運命を共にしたとも言えよう。

仁春寺でも白い猫が飼われていた。ミサエはこの寺に道子のための墓を建て、自分もここに入ることにしていたのだが、道子の供養のために訪れた時に現れたのが、この寺の坊守ユリであった。ユリは林家の次女で、ハツが難産で死ぬ思いを味わったときにミサエを必死に助けてくれたかつての少女である。このとき寺で飼われていた猫はマロといった。前住職が餌をあげていたら懐いた白猫の子孫で、マロという命名はお公家さんの意味ではなく、マシユマロから来ているというエピソードが語られている(第一部「第三章 山葡萄」四)。

仁春寺の白い猫は第二部でも登場する。雄介が母ハナに大根を持っていくよう頼まれ(これはあくまでも雄介をユリに会わせるための口実だった)、仁春寺を訪れた時だ。坊守ユリはハナの妹である。猫の名前は「だんご」であった。雄介はもともと猫が好きだったが、だが、猫を毛嫌いする家族の存在もあり、猫は飼えなかったのである。そのとき、だんごは雄介の膝の上に乗る、甘える仕草を見せた。実母ミサエが既に亡くなっており、彼女が道子と共に埋葬されていることを、このときユリの話で雄介は知ったのである。

このように、白妙をはじめとして、さまざまな白猫が名前を変えて登場していた。そのことを踏まえると、この作品でユリと雄介が会話する結末部分は大きな意味合いを持つてくるのが伺える。

叔母の問いで、雄介は記憶を探る。確か、人なつっこい、真つ白な猫がいた。高齡だということ、おっとりした性格だったのを覚えている。

「あの猫ね、まだ元気なのよ。近所で生まれて放置された子猫たちを自分の子みたいに面倒見ててね。いっぱいいて賑やかなのなんのって。よかつたら撫でに来てやって」

「はい、ぜひ」

雄介はかつて触れた柔らかい感触を思い出す。温かくて、傍にいただけで心が緩んでくるような。そうだ、卒業して家に戻ってきたら、叔母さんに頼んで猫を分けてもらうのもいいかもしれない。雄介はそう決意した。そしてこの家のどこかに、猫が安心して眠れるような場所を。何にも脅かされることのない、静かで、温かで、光差す場所を作るのだ。

(第二部「第二章 菩提樹」三、傍線・小田島)

実母ミサエ、実姉道子、そして雄介と、彼らはいずれも白猫の温もりで心が慰められた人々である。そして根室にとどまる決意をした雄介が、吉岡家で長らく飼われていなかった猫を飼おうとしていることも、当事者の与り知らぬことはいえ、象徴的な意味合いを帯びてくる。それは踏みじられた大婆様の意思を復活させるにも等しいと言え、言いすぎであろうか。

最後にこの作品の各章に付けられたタイトルについて触れたい。この作品は二部構成となっている。

- 第一部 第一章 捻じ花
- 第二章 蔓梅擬き
- 第三章 山葡萄
- 第二部 第一章 無花果
- 第二章 菩提樹

いずれも植物の名前がタイトルになっている。全五章のうち、後半の三章は本文からそのタイトルの由来を類推することは可能だ。

道子が自殺を図ったのが、山葡萄の蔓であった。第一部「第三章」はそのこと

が描かれている。また、第二部「第一章」では、「本当に菩提樹はね、無花果の仲間でね。蔓性の植物、分かる？ 山葡萄みたいな、ツルウメモドキみたいに、他の木に絡み付くの」という、ユリの言葉がある（傍線・小田島）。そして、第二部「第二章」では、小山田俊之をはじめとして、人に絡み付いて絞め殺していこうとする人間の姿が、まさに菩提樹にたとえられていた。

だが、最初の二章における「捻じ花」「蔓梅擬き」については、本文でそれを示す根拠が見当たらない。ちなみに百科事典の記述によると、「ネジバナ」は「別名モズジリともいうが、ともにねじれた花序のようすを表す。根茎が短く、太く肥厚した根を束生する」、「右または左まきのらせん状に花を密につける」とある。一方の「ツルウメモドキ」は「つる性落葉低木、ツルモドキともいう」、「秋に熟して割れると、中から橙赤色の仮種子に包まれた種子が現れて美しいので、よく生け花の材料としても用いられる」とされている（※⑤）。

断言はできないが、「捻じ花」はその捻れるところに特徴があり、それは作品の要ともなる菩提樹とも通底し合うものがある。ミサエが根室の吉岡家でこき使われる状況を示しているとも言える。

「蔓梅擬き」は写真を見るとかなり色鮮やかである。根室を離れ、いったんは札幌の自由な空気を吸ったミサエが小山田武臣に懇請を受け、再び根室に戻って苦勞するものの、木田浩司と見合いをし、結婚を決めるに至るまでのプロセス、かなり人生の中でも変転の激しい時期を表していると言えるのではないか。

それまでも河崎は、作品の中でかなり独特なタイトルを付ける傾向があった（『東廼遺事』『颯風の王』など）。そのタイトルの意味するものを考察させる。河崎作品にはそのような働きもあるのかもしれない。

## 【注】

（※①）『オール讀物』（直木賞発表合併号、二〇二二・一〇）。

（※②）河崎秋子講演会「失われたもの、贖われたもの」（釧路文学館主催、釧路市中央図書館多目的ホール、二〇一九・一一・二二）。

（※③）『絞め殺しの樹』に込めた思い」（NHKほっとニュース web、二〇二二・八・九）。

（※④）三浦綾子『嵐吹く時も』（主婦の友社、一九八六・八）に、母ふじ乃と娘

志津代が風呂の中でこのような会話を交わす場面がある。

ふじ乃は先に立って湯ぶねに入った。その隣りに、志津代も体を沈めた。窓の外がほのかに明るい。（略）

「あのね、志津代。女が大人になったしはね、神さまが教えてくれるの。いつ、赤ん坊がお腹に入ってもいいほどに、体が大きくなったらね、毎月、血が流れ出るのよ」

ふじ乃は一気に言って、ふっと吐息を洩らした。

「血？ 血が出るの？ どこから？」

「……」

「ね、どこから？」

血と聞いて、志津代は咳きこんで尋ねた。

「赤ちゃんの生まれるところからだよ」

（略）

「そう一人残らず。だからね、その時はおつかさんに知らせてね。大人になつたお祝いにお赤飯を炊くからね」

（湯けむり）一、傍線・小田島

ふじ乃が時折、吐息を洩らしたり、沈黙したりしながらも、娘の質問に答えているのが分かる。それだけ大切なことを母親が娘に伝える、美しくも厳粛な場面だ。

（※⑤）『世界大百科事典』（平凡社、一九八八・四）。